

計 量 史 通 信

Communications in Historical Metrology

No .47

日本計量史学会が総会を開催（2月24日、東京都新宿区・神楽坂エミール）

21世紀の計量史研究体制を固める

菘輪善蔵会長、前田親良、山田研治副会長の新体制

法制史、行政史など近代計量史の再掘り起こし課題に



日本計量史学会は2月24日(土)午後、東京都新宿区の神楽坂エミールで総会を開いて新年度事業の概要ならびに会務執行の新役員体制を決めた。同会は会員規模の増大と研究活動の多様化に組織機構を対応させるため会則を改正、また理事、幹事の役員数を15名から21名に増員した。新会長には菘輪善蔵氏、副会長には前田親良氏、山田研治氏を選出した。

前会長の岩田重雄氏、副会長の高田誠二氏は病気を押し立て重職を務めていたが、再選を主治医に制止されたため重職を降りた。しかし両氏とも体調に合わせた調査・研究活動は継続するほか、計量史学会に国立研究機関を経由して

文部省などから委託された計量資料の調査活動には従事する。新役員は別項のとおりであり、4月1日付けで就任した。監事に初めての女性役員として横田茂子さんが就任したが、これにより学会の指針を満足する模範的な組織になる。

計量史学は、計量に関するすべての歴史的事実などを解き明かすことを通じて人類の豊かな未来を切り拓く学問であり、日本計量史学会は1978年4月1日に設立された。前会長の岩田重雄氏、前副会長の高田誠二氏は日本計量史学会の設立以来の会員であり、会の研究体制ならびに組織の充実発展に力を尽くしてきた。

新会長の菘輪善蔵氏は元計量研究所第4部長、元計量教習所所長などを歴任してきた行政経験豊かな密度計測の専門家であり、近代の計量の法制度と行政の変遷に関する実情に通じている。また、計量史研究で大きな実績を残した小泉袈裟勝氏（故人）と連携して計量史を研究してきており、計量史に関して総合的な知識を持つ人として知られている。

計量史学会は、発足時小泉袈裟勝氏、鈴木和夫氏など計量研究所ならびに都道府県計量検定所等行政機関の関係者が役員として活躍していたことから、会員構成に占める元計量行政機関関係者の比率が高い。会員構成は度量衡史研究家、縄文時代等古代史の研究家、江戸期のはかり座の研究家、度量衡器のコレクションと研究家、科学史・技術史の研究家、先端的計測技術の研究家・技術者など多方面に及んでおり、現役の大学・高校等の教員、公務員も多くいる。

同学会は組織規模と研究活動の体制が小さかったころの名残で役員改選の選挙を内輪的に実施してきた。しかし今回は50名近い会員本人の出席のもと総会を開いて役員を選出した。新会長に就任する菘輪善蔵氏は「私の計量史研究は緒についたばかりであり、誇れるような研究はないが、今後は会員等関係の皆様と力を合

わせて計量史研究を盛んにすると共に、自分自身の研究でも何物かを残して行きたい」と述べた。また「計量史は計量業務に関わる者であれば誰でもが取り付くことができるものであり、年会費 7000 円を納めれば計量史研究や計量史通信が配布される。そうした会誌に親しむことを通じて調査研究の足がかりが



総会参加者が記念撮影（2月24日、神楽坂エミールで）

つくれると思うので、多くの

人々に会員になって欲しい」と計量に関わる人々にメッセージをおくっている。
女性として横田茂子さんが役員に就任するが、女性の役員就任は初めてであり、これは学会の指針に沿うものである。監事に就任する横田茂子さんはとまどいを隠さないが総会後のレセプション会場では役員の大

学教員らから励ましの言葉を贈られていた。
日本計量史学会会員数
(2000年12月31日現在) 正会員 141名・団体、賛助会員 1団体、準会員 1名、名誉会員 2名、以上計 145 会員。【会員数の推移】(設立 1978年4月1日) 1978年4月1日 = 19名、1978年8月31日 = 86名、1979年2月28日 = 102名、1985年5月31日 = 100名、1989年6月20日 = 101名、1993年7月7日 = 104名、1995年3月31日 = 104名、1997年9月30日 = 114名、1999年3月31日 = 138名、2000年12月31日 = 145名。

総会に付随した研究発表会を開催

日本計量史学会は会員研究者の研究発表の場を増やすため総会に付随する研究発表会を開いた。発表者と研究内容は別項の9件で、各発表ごとに制限時間を超える質問がつづいた。

岩田重雄氏の研究によって縄文期の住居跡の柱跡から尺度を割り出す手法が確立している。岩田氏は縄文期にも「ものさし」はあったはずであり、その現物がいままで発掘されていないのは遺跡発掘の指揮者に「ものさし」を見つけだそうとする意識がないことがその原因であるとの考えられている。遺跡発掘において遺跡等の測長や遺物の質量計測の適正化が解決課題でもありとも岩田氏から指摘されている。縄文遺跡の尺度をめぐるもう一つの研究事例発表に対しては数学者の高田彰氏からは、建物建設に当たって発表のような測長は技術的に不可能との疑問が出されるなど、今後の研究に役立つ議論が活発に交わされた。大隅亜矢子さんは、正倉院古文書から古代はかりの記述を発見しており、その内容を説明した。

9件の研究発表

- ①旧石器時代の計量 - 東アジアの营造尺と定量的計量の始まり - = 岩田重雄
- ②縄文時代の尺度をめぐって = 池谷信之
- ③「正倉院文書」にみる古代のハカリ = 大隅亜希子
- ④金工後藤一門の基準花押 - 大判・分銅の「極判」を中心に - = 西脇康
- ⑤S・LOCK一等書記官による日本の度量衡に関する議会報告 = 山田研治
- ⑥近代の天びんの技術特徴と度量衡雑誌の復刻 = 山下喜吉
- ⑦ダイヤゴナル目盛の手書きとその作業復元（ビデオ放映を含む） = 松本栄寿
- ⑧cm をセンチと読み、km もkg もキロと読むことの弊害とその対応 - 算数・数学教育の観点から - = 高田彰
- ⑨最近の収集品から - ものさし・ます・はかり - = 野口泰助

総会基調報告（要約、2001年2月24日） 高田誠二副会長

《報告の性格を考慮して、個人名をいっさい省略する》

【学会草創期の志】

当学会は、3名の識者の呼びかけのもとに、16名の同志を得、合計19名を発起人として、1978年4月1日に発足した。国際計量史委員会の会合(1975年,1977年)との接触およびそれへの参加(各1名、2名)も、当学会設立への強い誘因となった。当初の会員は、主に、計量史学の中の狭い分野を深く精査考察する少数の研究者と、趣味として計量史の個別課題とくに歴史的計量器蒐集調査に関心を抱く同好者とで、構成されていた。

事務局は日本計量新報社内には置かれた。1978年に広報誌「計量史通信」、1979年に論文誌「計量史研究」が発刊され、定期刊行が続けられた。

【同好会と研究会】

設立の翌年2月、会員は101名に達し、以来、「計量史をさぐる会」その他による情報交換の実績は顕著となった。更に1980年代、(当時の)日本計量協会との提携による計量史資料(文献と実物)の広範なサ・ヴェイがなされ、集積された大量のカ・ドの全貌が会誌上に発表された。

ただし、活動の様態は、平均して言えば通人集団の同好会に近く、研究対象や会員数の拡大への意欲は醸成されにくい状況が見られた。

【新しい体制への胎動】

1990年代なかばまで、「通信」各号に「会員数ほぼ100」の記事が繰り返されていたが、1995年から「さぐる会」は計測自動制御学会の質量・力計測部会(のち力学量計測部会)と共同で開催されることとなり、活動領域拡張の気運が強まった。他方、1995年、当学会は日本学術会議の広報協力学術団体に指定され、また1996年には文部省から学会番号の設定を受けた。反面その頃、事務局運用に難点が生じ、1996年以降、一役員の私邸で事務処理をせざるを得なくなった。

こうした状況とも呼応して、会則改正・役員選挙規則制定の声が高まり、1997年からの検討結果に基づき1998年4月から新しい会則と役員体制をスタ・トさせた。その効果は、会の運用の諸方面に次々と波及し、部会の発足・会員募集策の強化・賛助会員の誕生などの形で顕現した。

1999年春、当学会は、日本学術会議からの連絡に対応して登録申請の手配を進め、5月に文書を提出、厳正な審査を経て、9月に、学術研究団体として同会議第1部に登録された。関連研究連絡委員会については希望どおりに「歴史学」および「考古学」との指定がなされた。

【タスク・フォースの活動と提言】

続いて1999年10月、「少数の役員による基本問題検討の時限集会」としてのタスク・フォース(6名、のち7名)が編成され、副会長の司会のもとに、翌年2月まで3回の会合を開いた。審議の理念を「熱願冷諦(ぜひとも実現したいことと、いさぎよく諦めることを、峻別する)」と定め、現実に即して検討を進めた。

反省すべき点として、会務運用の負担が少数の個人に集中していたこと、他分野の学術およびその団体との接触に関し閉鎖的であったこと等が指摘された。そして会勢高揚には、研究会・見学会の活性化を通じて会員のメリットを創出しつつ会員増加をはかり、もって財務を健全化し、独自の学会事務室を確保すると共に、事務処理面では奉仕に依存し過ぎず「契約」を重視し外注も活用すること、計量関係3団体の統合の動きにも着目して活動拠点を模索すること等の一連の戦略が必要であると、合意された。併せて、現理事の1名に事務局担当を委嘱するよう理事会に諮ることとした。

【会則改正と総会開催】

タスク・フォースの提言を実行に移す意図も含めて、会則の再改正および会則による総会の開催が発議され、本日ここに、多数の会員の参加を得て、総会の成立を確認することができた。

【最近の状況】

最近三年ほどの間、次のような動きが顕著になってきている。

1. 計量関係公共文化財の研究(東京国立博物館、国立科学博物館ほか)

2. 歴史的な計量計測機器の蒐集（個人、企業）の充実、公開化と評価
3. 文部科学省・科学研究費（特定領域）による計量史大規模研究の提起
4. 度量衡分野に局限されない、現代計測をも視野に入れた歴史研究

【総括】

会員のたゆまぬ努力によって、いくつかの困難を克服してきた当学会は、ここに改めて、次の基本理念を確認しておきたい：

- a. 草創期の、アマチュア気質に支えられた初心を忘れない。
- b. 社会への、開いたまなざしと責任ある対応を忘れない。

以上、本日までの会勢の要点を報告した。厳正なご検討をお願いしたい。

2000 年度日本計量史学会総会（第 1 回） 議事録

開催月日 2001 年 2 月 24 日（土） 13:00 ~ 14:00

開催場所 東京・神楽坂エミ - ル

開会挨拶 岩田会長

総会出席者報告 出席 38 名 委任状 32 名 計 70 名

会則第 7 条（正会員 141 会員の 1/10 以上）の規定より総会成立。

議長選出 会則付則第 2 条により会長を選出。

議事録署名人選出 稲葉千代吉氏、横田茂子氏を指名。

議 事

第 1 号議案 事業報告案 承認可決されました。

第 2 号議案 会計報告案 承認可決されました。

第 3 号議案 会則改正案 原案とおり承認可決されました。

付帯事項 会長、副会長は理事会で選出、総会で承認する。

第 4 号議案 役員改選 事務局案のとおり新役員が選出、承認されました。（新役員名等は別項）

第 5 号議案 次年度事業計画案（創立 25 周年記念事業等）

事業計画案 承認可決されました。

会 長 岩 田 重 雄
副会長 高 田 誠 二

< 2000 年度会計報告 >

2000 年 4 月 1 日 ~ 2001 年 3 月 31 日

(単位 : 円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
会費収入	1,205,000	印刷費	786,852
寄付金	315,000	通信費	276,790
学術著作権協会	45,422	研究会費	23,272
機関誌等販売代金	175,875	什器リ-ス費	113,400
雑収入	247	消耗品費	82,560
総会懇親会余剰金	33,566	会務執行費	8,070
		当期余剰金	427,640
計	1,775,110	計	1,775,110

余 剰 金 処 分

前期より繰越	1,535,703 円
当期余剰金	427,640 円
期末余剰金	1,963,343 円
次年度へ繰越	1,963,343 円

日本計量史学会役員、顧問、名誉会員（2001年4月1日～）

会長	菘輪善蔵（日本計量振興協会 顧問）
副会長	前田親良（大阪工業大学 教授）
副会長	山田研治（東京都立牛込商業高等学校 校長）
理事	新井宏（韓国 国立慶尚大学 招聘教授）
理事	内川恵三郎（日本品質保証機構 計量計測センタ - 参与）
理事	川村正晃（大阪府立大学 助教授）
理事	菅野允（元電子技術総合研究所）
理事	黒須茂（小山工業高等専門学校 教授）
理事	斉藤和義（東京計量士会 副会長）
理事	沢辺雅二（ミットヨ 技術顧問・同博物館 館長）
理事	高田誠二（前計量史学会副会長 北海道大学 名誉教授）
理事	高松宏之（日本計量新報社 編集部長）
理事	馬場章（東京大学 助教授）
理事	西村淳（函館大学 助教授）
理事	西田雅嗣（京都工芸繊維大学 講師 一級建築士）
理事	西脇康（白梅学園短期大学 講師）
理事	松本栄寿（横河電機技術館準備室長・学芸員）
理事	宮川渉（古墳研究家）
理事	横田俊英（日本計量新報社 社長）
監事	多賀谷宏（元計量研究所・計量コンサルタント）
監事	横田茂子（元大学図書館 司書）
顧問	岩田重雄（前計量史学会会長）
名誉会員	林英夫（元計量史学会会長）
名誉会員	藤原泉（前日本計量新報社 社長）

日本計量史学会運営体制（2001・2002年度）

学 術 部 部長担当理事 高田理事

前田副会長・岩田顧問・黒須理事・菅野理事・西脇理事・鈴木和夫氏
山下喜吉氏・大網功氏

・国立科学博物館等の調査委託事業の推進

事 業 部 部長担当理事 内川理事

菘輪会長・前田副会長・山田副会長・斉藤理事・横田理事・西田理事
宮川理事・川村理事・西脇理事

・「計量史をさぐる会」の企画・運営

・「25周年記念事業」の企画・運営

編 集 部 部長担当理事 沢辺理事 次長 高松理事

・「計量史研究」編集・発行責任者 沢辺理事

菘輪会長・山田副会長・高田理事・多賀谷監事・菅野理事・西田理事
新井理事

・「計量史通信」編集・発行責任者 高松理事

菘輪会長・横田理事・斉藤理事・横田監事

会員・渉外部 部長担当理事 横田理事

・国内部担当 横田理事

袁輪会長・前田副会長・斉藤理事・黒須理事・西村理事

・国際部担当 松本理事

高田理事・馬場理事・岩田顧問

総務部 部長担当理事 斉藤理事

山田副会長・高松理事・横田監事

・事務局管理・会計（会費徴収）・会務事務連絡・会員管理（入・退会等）

・機関誌等発送

日本計量史学会会長の就任にあたって

日本計量史学会会長 袁輪 善蔵

2月24日開かれた日本計量史学会総会で、設立以来23年に亘って立派な会長を戴いて来た当日本計量史学会の会長をお引き受けることになりましたが、研究実績もなく、実力もない私が任務を果たせるかどうか心中穏やかでないものが渦巻いております。

会長をお引き受けることになりましたのは全くの偶然と突発的なことでした。それは本年2月中旬に開かれる学会初の総会を前にした総会運営の為の準備会が開かれました。その席上、今までの予定が突然と崩れ、誰かが会長を引き受けなければ間近に迫った学会初の総会が開けないことになり、今まで準備してきたことが水泡に帰してしまう状況になってしまったための事でした。その会議の出席者の中で私が一番の年配であったことと、60年近くを計量の世界にいた事で突然とお鉢が回って来たものと思っています。



私が日本計量史学会と係わりを持つようになりしたのは、計量研究所の先輩である小泉袈裟勝さんとのことからです。早くから会員ではありましたが、特に深い関係はありませんでした。それが、2年程前、計量研究所時代にご一緒していた高田誠二さんと多賀谷宏さんからの強引な勧誘もあって理事を引き受ける事になってからの事です。度量衡の歴史については早くから多くの先輩達の話を聞かされ、興味は持っていましたが研究分野までは、手が届きませんでした。ただ、最近私の郷里千葉県佐原市には日本最初の実測地図を作った伊能忠敬や、我が国の度量衡を研究した漢学者清宮秀堅も輩出していることを知り、いささかの感慨も加わり、もっと早く勉強を始めていればと先に立たない後悔をしているところです。

長かった計量の世界において老兵ともなっていた私が何故また、この大役をととも思いましたが、緊急避難的なことと理解して2年の任期を果たしたいと思っています。経験豊富な副会長、多数の理事の方々がおられ事業の企画、運営に携わっていただけますし、会員増強にも力を貸して戴けます。組織についても総務部の他、学術研究部、事業部、編集部、会員・渉外部、が設けられ各部長の下で企画、運営が行われることになりました。

開かれた学会を目指し、会員皆様のご協力を得て、幅広い分野と参加し易い学会会合を増やし、歴代会長、理事の名を汚さないよう学会発展に微力を尽くしたいと思っています。会員皆様のご協力を心からお願い申し上げます。

計量史をさぐる会 2001

国立科学博物館所蔵の歴史的計量計測機器- 展示と討論の会

共 催 日本計量史学会（第24回）（社）計測自動制御学会・力学量計測部会（第57回）
産業考古学会 東京産業考古学会 技術史教育学会 （社）日本計量振興協会
協 力 国立科学博物館
後 援 （株）日本計量新報社

もと計量研究所の陳列室に展示されていた史上の計量計測機器をご記憶でしょうか。明治制度の起源と言われた折衷尺、藤島常興製作の尺原器、京升や韓国升、大野規周製作の天びんから、近代の浮秤、高温計まで、歴史を伝える多数の文化財が並んでいました。

時は流れて、計量研究所は、つくば地区に移り、更に本年、電子技術総合研究所その他の機関の関連部署と共に、あらたな独立行政法人・産業技術総合研究所の計測標準研究部門を構成するに至りました。この間、諸機関は、計量計測に関する歴史的機器の保存の問題に直面し、協議の末、それらを逐次に国立科学博物館へ寄託してきました。

一方、国立科学博物館も、独立行政法人への移行と平行して、日本科学技術黎明期の資料の体系的研究に意欲を示し、計量計測については、上述の寄託機器のほか広く個人・地方資料館・企業の計量計測機器資料にも着眼した、広範な実証研究を構想しています。

ここにご案内する「展示と討論の会」は、これらの趨勢に呼応して、国立科学博物館所蔵の新旧さまざまな計量計測機器を展示する傍ら、識者の解説・所見をベ - スとして、関心をおもちの方々のご発言を誘い出そうとするものです。多数のご参集を期待します。

期 日 2001年10月13日（土） 13:30 ~ 19:00

プログラム

A：展示と討論の会 13:30 ~ 16:30

会場 国立科学博物館 新宿分館 研修研究館 講堂

〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 [地図ご参照]

JR 山手線・新大久保 - 徒歩8分 / 中央線・大久保 - 北口徒歩6分

参加費（資料代を含む）1,000円（当日、会場で申し受けます）

内容（詳細は次ペ - ジ）

特定6分野の歴史的計量計測機器それぞれ3点を抽出展示し、委嘱した
話題提供者とコメンテイタ - からの発言を基調として討論を展開します。

B：懇親会 17:00 ~ 19:00

会場 サンパ - クホテル（科学博物館からJR 駅方向へ徒歩2分）[地図ご参照]

参加費 5,000円（開会前に会場で申し受けます）

申込み方法 次の事項をハガキまたはFAX、電子メールで下記へお申込み下さい。

「計量史をさぐる会 2001」 氏名、〒番号、住所、電話（あればFAX、電子メールアドレスも）

A 討論会 / B 懇親会（出席したい会に 、一方でも両方でも可）

申込み先 〒162-0837 東京都新宿区納戸町25-1 日本計量会館内 日本計量史学会

FAX 03-3269-7989 E-mail shm@beach.ocn.ne.jp

参加証はお送りしません。満席でご出席いただけなくなった場合にはご連絡します。

計量史をさぐる会 2001 (詳細)

A : 展示と討論の会 13:30 ~ 16:30

会場 国立科学博物館 新宿分館 研修研究館 講堂 [地図参照]

参加費 (資料代を含む) 1,000 円

開会の挨拶 13:30 ~ 13:40

内容 特定6分野の歴史的計量計測機器それぞれ3点を抽出展示し、委嘱した話題提供者とコメンテイターからの発言を基調として討論を展開します。

分野	話題提供者	コメンテイター
総論	鈴木一義 (国立科学博物館)	大網功 (東洋大学)
1. 長さ計 (ものさし)	沢辺雅二 (ミト)	藤岡健夫
2. 体積計 (ます)	鈴木和夫	馬場章 (東京大学)
3. 質量計 (はかり)	山下喜吉	内川恵三郎 (日本品質保証機構)
4. 密度計・比重計	横田賢次郎 (横田計器製作所)	蓑輪善蔵
5. 電気計測器	松本栄寿 (横河電機)	菅野允
6. 熱と光の計測器	高田誠二	小川実吉 (横河総合研究所)

司会 総論 ~ 3.: 山田研治、4. ~ 6.: 富田徹男

閉会の挨拶

B : 懇親会 17:00 ~ 19:00

会場 サンパ - クホテル (科学博物館から JR 駅方向へ徒歩2分) [地図参照]

参加費 5,000 円 (開会前に、会場で申し受けます)

会場案内地図

国立科学博物館 新宿分館
(案内図)



会員消息

学位取得

本会理事・松本栄寿氏（機技館準備室長・学芸員）は、2001年3月8日付けで、工学博士の学位（玉川大学大学院工学研究所）を取得されました。

論文題目は「プロセス制御用計測機器の開発に関する研究」です。

慶祝の意をこめてお知らせします。

通商産業大臣表彰

- ・加島 淳一郎氏（株）オバル代表取締役社長
- ・小林 健蔵氏 秤乃館館長
- ・日高 鉄也氏 日高計量士事務所
- ・山本 弘氏 元計量研究所

上記4氏は、平成12年度（11月1日：計量記念日）計量関係功労者として通商産業大臣より表彰されました。敬意をこめてお知らせします。

岩田重雄顧問が計測連合シンポジウム「先端計測2001」で発表

日本学術会議、計測工学専門委員会は多数の関連学会の協力によって計測連合シンポジウム「先端計測2001」を5月16日（水）、17日（木）の両日、東京都港区六本木の日本学術会議講堂で開催した。シンポジウムは「計測技術における21世紀の展望」のパネルディスカッションと講演を実施した。岩田重雄日本計量史学会顧問（前会長）は「東アジアの長さの計量の起源 - 特に日本について - 」を発表した。

本シンポジウムは、分野を超えて有効な計測の理論、技術、手法、装置、システムなどに関する最新の知見を、各分野における最先端の研究者・技術者による講演や討論をつうじて、共通の学問・技術資産とすることにより、計測工学の統合と発展に貢献する事をめざしている。

<東アジアの長さの計量の起源 - 特に日本について（岩田重雄氏の発表要旨）>

定量的な計量は、基数詞と単位の結合によって行われる。東アジアにおける基数詞の発生年代は日本語の倍加法をモンゴロイドの基数詞に応用し、これと遺伝子からみた人類移動年代を組合せることによって、5～7万年前と推定される。現存する東アジア最古の尺度は商尺で、その1尺の平均値は17.1cmであった。古代住居跡から統計的方法で求めた1（尺）の長さは、中国、朝鮮、日本、東シベリアで16～18cmであった。营造尺の検出される上限は2.4万年前であるから、計量単位の発生年代は数万年前と推定される。

寄贈図書

- ・「21世紀の科学を読む」*近代文芸社
寄贈者：園部利彦 2001.1.10
- ・「近世日本社会における金貨の発行・流通に関する実証的研究」*東京大学史料編纂所
寄贈者：馬場 章 2001.1.24
- ・「京枳座福井家文書 上」*京都歴史資料館
寄贈者：京都歴史資料館 2001.2.14
- ・日本史小百科「貨幣」*東京堂出版 滝澤武雄・西脇 康共編
寄贈者：西脇 康 2001.5.26

事務局移転のお知らせ

長年にわたり、前岩田会長のご自宅を事務局としてお願いしておりましたが、この度(社)日本計量振興協会のご協力により、事務所の一部を借用し、事務局を移転しました。

<新事務所> 〒162-0837

新宿区納戸町 25 - 1 日本計量会館

TEL・FAX 03 - 3269 - 7989

電子メール shm@beach.ocn.ne.jp

・郵便為替 00170 - 9 - 66974

・銀行口座 東京三菱銀行 三鷹支店(222)
普通 1233805

いずれも「口座名 日本計量史学会」

*新事務所は、常勤者がおりません。ご連絡はなるべくファクスまたは電子メール、郵便でお願いします。

<交通のご案内>

地下鉄大江戸線 牛込神楽坂駅(A1番出口)より徒歩3分

地下鉄東西線 神楽坂駅(矢来口)より徒歩9分

地下鉄有楽町線・南北線 市ヶ谷駅(5・6番出口)より徒歩12分

JR 総武線 市ヶ谷駅より徒歩(17分)または都バス 大久保駅行きにて「牛込北町」下車2分

日本計量会館のご案内

〒162-0837 東京都新宿区納戸町25-1



第8回国際計量史会議の開催予定

国際計量史委員会 (Comité International pour la Métrologie Historique) の国際会議 (Congrès de Métrologie) が2001年7月8日から14日まで、メキシコで開催されます。

予告されている研究発表は次のとおりです。

- ① F.Günerngun(トルコ): 15世紀トルコにおける薬用度量衡
- ② H.U.Vogel(ドイツ): 7世紀初期中国における計量と計量思想
- ③ M.A.Denzel(ドイツ): 18世紀ハンプルクにおける包装と重量
- ④ J.U.Moller(デンマーク): アイスランドの度量衡と税
- ⑤ J.C.Hocquet(フランス): 20世紀末東南アジアにおける計量の折衷と新制度創出

トルコからの報告者 F.Günerngun 女史は、「計量史研究」、No.22 と No.23 で多賀谷会員が邦訳紹介した論文の原著者です。Vogel 氏、Denzel 氏、Hocquet 氏は、当学会会員とご縁の深い方々です。

なお、この国際会議については当学会役員会(2000年4月、2001年4月)で略報がありましたが、事情あって「通信」では十分な報道ができませんでした。同時期に同地で国際科学史学会も開かれ、日本からの参加も予定されていますので、終了後に関連情報が得られ次第、お知らせします。

創立25周年記念行事の開催

当学会が設立されてから来年が25周年にあたり、下記の概要の記念事業を計画しておりますので、お知らせします。(詳細が決まりましたら計量史通信等でお知らせします)

日時: 平成14年2月23日(土) 午後

場所: 東京(会場は選考中)

1. 記念式典において功労者の表彰を行う。
2. 特別講演を含む講演会等を開催する。
3. 記念誌の編集と刊行

新入会者紹介（敬称略）

关 増健

丘 光明

進藤 進

岡野 公

奥村 彪生

蔵原 清人

土田 泰彦

唐沢進太郎

浜 輝雄

日高 鉄也

飯塚 幸三

桜井 慧雄

小川 実吉

吉川 輝征

野田 善之

浅野 栄市

足立 孝之

菅原 元治

住所等は省略

準 会 員

矢島不二男

住所変更

須股 孝信

中国訪問と中国計量制度の紹介

会員、松本計量士事務所長 松本 克一

1999年5月4日付けで中国湖北省宜昌市計量測試所、高級工程師で宜昌市計量測試所計測学会の秘書長を名乗られる趙子敏氏から手紙が届いた。

趙氏は、計量の仕事をして30年間されており、最近日本計量史学会にも参加した。その学会の名簿から小生にも連絡があり、これが契機で文通が始まった。趙氏から再三の手紙より宜昌市、名勝旧跡「三遊洞」、三国史の中の「関羽の墓」などの紹介があり、訪中のお誘いであった。

2000年に入って、交歓した年賀状、Eメールなどで、趙氏も6月に定年退職されるとの事だったので、この機会に趙先生の招聘に甘んじることにし、家内同伴で訪問することになった。



趙先生より、4月は、気温 18 ~ 23、湿度 60% ~ 70% 雨量は極めて少ないとの連絡もあり4月18日~22日(4泊5日)の日程で準備を進めた。4泊の内3泊を趙氏宅にお世話になり、今回の旅行は、専ら趙先生にお任せで宜昌市計量測試所と中国一の水力発電所を見学した。観光は、22日名勝旧跡「三遊洞」と市内観光のみであった。何しろ中国は広大な国で短期間の旅ではいろいろ訪問するのは無理と実感した。趙先生から期間の延長を求められたのもその意味であった。

中国は、市の区域内に県、鎮、村が入る、宜昌市行政区域内の面積は 21,084 km²。人口は約 400 万人。宜昌市は、長江(揚子江)中流にあり、上海と重慶の中間で、有名な長江三峡観光の出港地でもある。今回の目的である宜昌市計量測試所を見学したので紹介する。

19日に測試所を訪問し、3階にある趙先生の執務室に案内された。大きな個室で先生の机が一つ入口にあり、窓際に応接セット。壁には親日家らしく日本地図、数年前の計量管理協会のポスターと日計協の計量記念日ポスターが貼ってあった。庁舎は新しく湖北省宜昌市技術監督局(技術關係綜合庁舎)で敷地面積 26,000 m²。建物は地下1階、地上5階建で総面積は約 10,000 m²。1階と2階が計量測試所、品質検査所、繊維検査所等8部門ある。

まず、測試所長(黃朝元氏)、副所長(謝述堯氏)工程師(陳發民氏)を紹介され、この3名と趙氏の通訳で所内を案内して頂いた。宜昌市技術監督局長、高級工程師(范海生氏)は奥様がご病気で入院中のため不在で面会出来なかったが、さる、5月12日奥様が亡くなられた様である。ご冥福をお祈り申し上げます。

計量測試所の検定をしている計量器は、質量、長さ、圧力、タクシー、温度、力計、流量、電気計器等多種多様その他、光学、測量、化学機器等の試験も行なっている。質量は大型はかり、圧力は中国は既にパスカルである、タクシーメーターの検査は、日本の方法と同様、但し検査の回数は、年に2回(6ヶ月)、ガソリン量器は、業者が検査これも同様(6ヶ月)である。タクシーメーターの走行検査は、日本と同じくローラーの回転により検査が行なわれていた。大型はかりの検査用500kg(500kg)車付きバスケット数10箇と、クレーン付き検重車で巡回検査を行なっているなど説明を受けた。

昼食になり、近くの大きな病院内の食堂(別室)所長以下ご案内戴いた皆さんによる歓迎会を開いて戴きビールで乾杯、趙先生の通訳で歓談する。



計量測試所の皆さんと。右から謝副所長、黃所長、松本、家内、趙先生、陳工程師

宜昌市の最後の訪問は、21日午前中に中国最大の葛洲壩(かつしゅうは)ダムの水力発電所を見学、長江の中程に二つの島があり、大江(陸と島間)に14台、島と島の間には7台、合計21台の発電機がある。上流と下流の落差は17mで発電所の両サイドは水のエレベーターで船の航行も可能。

発電所の計測試験室では、電器、温度、圧力計測機器検査室等を見学した。圧力単位はパスカルである、古い圧力計は記号を替え使えるものは使用している。その他一般が見学出来ない所まで業俊明主任に案内して頂いた。

なお、上流には、新三峡ダムが建設中である。完成予定は17年先でこれが完成すれば世界一のダムとなる。中国滞在中は、趙先生に上海空港での出迎えから宜昌空港でお別れするまで、至れり尽くせりの世話になり。そして親しくしていただいたご一家、親戚、また趙先生の友人、同僚の皆さん方のご懇情に対し深く感謝するものである。午後、趙先生と、宜昌空港で来日を要請するとともに再会を約束し、別れを惜しんだ。

【超不敏氏の履歴紹介】

1940年6月18日生れ 1957年10月～1962年10月西北工業大学(西安市)自動化計器専門卒業
1962年10月～1969年5月北京市計器研究所(技術員、物理エンジニア) 1969年5月～1977年5月湖北省受軸会社計量室主任・エンジニア 1977年5月～2000年6月18日宜昌市計量試験所(計量課長、高級エンジニア、宜昌市計量試験学会秘書長) 2000年6月19日～計量高級エンジニア・宜昌市三峡外国語学校の日本語講師

高田誠二さんの「単位のはなし」から

日本計量史学会監事 横田 茂子

私たちの身の回りには様々な計量単位があふれています。しかし意識して使っている人は少ないのではないのでしょうか。

身長はどのくらいですか?「Xセンチです」では体重は?「Yキログラムです。少々太めなのでダイエットでもしましょう。カロリーはどのくらいにしたらいいのでしょうか?」こんな会話はよくある話です。

しかし、これは計量の世界では正しい表現ではないようです。だからといって律儀にきちんと「Xセンチメートルです」「Yキログラムです」と答えるのでしょうか。またカロリーという表現に関しても使い方に制限があるようです。一般の社会生活において、正しい表現をしなければならないとはあまり考えてはいないでしょう。言語の社会性からいえば通用している言葉が市民権を得ているわけですから(最近はそのともいえないが)。

ところが、正しい認識のもとに使われないと大変なことが起こり得るということが実証されてしまいました。ロケット打ち上げの巨大プロジェクトが失敗した原因はなんと単位の読み違い、との新聞記事を目にしたことがあります。世界共通の国際単位系(SI)ですべてが表現されればいいのでしょうか……。

北海道大学名誉教授の高田誠二さんが「単位のはなし」を書いていらっしゃいます。

誌名 "S & Tジャーナル"、編集協力 文部科学省、編集発行 (財)科学技術広報財団

- | | | |
|-----|-------------------|--------------------|
| 4月号 | 大きい船と小さい船 | ハワイ沖の事故にからめて |
| | 速度の表現の違い | 普通の船と軍艦ではトンの意味が違う |
| 5月号 | 大きい宇宙船と小さい部品たち | ロシアの宇宙船ミールの帰還にからめて |
| | 質量及び力の単位 | 圧力の単位 |
| 6月号 | 円周率 | 学習指導要領にからめて |
| | 数の位取り | 角度の単位とラジアン |
| 7月号 | 暮らしの中の単位 | 厨房に立ち入る単位 |
| | 電子レンジと日本酒のお燗にからめて | エネルギーの単位 |

とにかくたくさんさんの似たような単位がでてきます。法定計量単位や特殊の計量に用いる単位。計量法で規制されている数多くの単位等々。知りませんでした。アルキメデスの原理やパスカルが生活の中でどのように関係があるかあまり考えたこともありませんでした。それらを分かり易く説明されています。高田先生のあまりにも時宜を得たテーマの取り上げ方に感心し興味をひきつけられました。文系人間には計算式等は難解で飛ば

して読みましたが、単位を考えるうえで一考すべき事柄が多いことを学ばせていただきました。

理系専攻の息子に「単位のはなし」を読んでの感想を求めましたら「分かり易く書いてあるね」と言っていました。機会がありましたら一読されることを皆様にお勧めいたします。

「S & Tジャーナル」は、最寄りの政府刊行物センターかサービスステーションおよび大型書店で手に入れることができます。購読についての問い合わせは、(財)科学技術広報財団総務部(電話 03 - 3586 - 0681)まで。年間購読料は7,320円(送料共)。

存亡の危機に立つ銀行系貨幣展示施設

理事、中央学院大学講師 西脇 康

景気の低迷と企業のリストラによって、ここ1年の間にあいついで企業の運営する貨幣展示施設が閉鎖、ないし閉鎖を発表した。

1970年代に設立ブーム

これらの施設は、東海銀行が1961年創立20周年記念事業として「貨幣資料館」を設立(1980年拡充、名古屋市、052-211-1111)すると、1970年代にかけて設立ブームが起こり、富士銀行「資料展示室」・三和銀行「貨幣展示室」・埼玉銀行「資料展示室」・第一銀行「資料展示室」(1971年第一勧業銀行として継承、東京都千代田区、03-3596-3216)・十八銀行「史料展示室」(1969年創立、長崎市、095-828-8178)などとして誕生した。

その後も、岡崎信用金庫資料館(1982年創立、岡崎市、0564-24-2367)、尼崎信用金庫「世界の貯金箱博物館」(1984年創立、90年拡充、尼崎市、06-6413-1163)が設立された。

1990年代に第2の設立ブーム

1980年代後半には、バブル景気をバネに設立の気運が生まれ、1990年代に第2の設立ブームが訪れ、さくら銀行「貨幣資料室」(神戸銀行のコレクションを基礎に1987年設立、神戸市、現在は三井住友銀行が継承、078-331-8101)、福井銀行資料館(1987年創立、福井市)、滋賀銀行「しがぎん貨幣資料室」(1988年創立、大津市、077-521-2141)、八十二銀行「八十二文化財団スペース82」(1988年創立、長野市、026-224-0511)、琉球銀行「りゅうぎん金融資料館」(1988年創立、那覇市、098-867-7406)、観音寺観光開発「世界のコイン館」(1988年創立、観音寺市、0875-23-0055)、大和銀行「貨幣資料館」(1991年創立、大阪市、06-6268-1770)、山梨中央銀行「山梨中銀金融資料館」(1992年創立、95年拡充、甲府市、0552-23-3090)、第四銀行「だいし金融資料室」(1992年創立、新潟市、025-222-4111)、千葉興業銀行「ちば興銀資料展示室」(1992年創立、千葉市、043-227-2141)、八ドソン・庶民の穴銭資料館「方泉處」(1992年創立、札幌市)、常陽銀行「常陽史料館」(1995年創立、水戸市、029-228-1781)、七十七銀行「金融資料館」(1998年創立、仙台市、022-267-1111)が、リニューアルないし創立した。

銀行合併などを機に次々閉鎖

しかし、この間にも富士・埼玉・三和銀行は銀行合併などを契機として施設を閉鎖した。富士・埼玉銀行のコレクションは金庫室に凍結され、三和銀行のコレクションは(財)江戸東京博物館に寄託された。そして、昨年12月末日をもって福井銀行資料館が一般公開を一時停止し、今年4月20日をもって八ドソン・「方泉處」が正式に閉鎖された。さらに5月29日付をもって、大和銀行の管財部長・貨幣資料館長連名の書面で、7月31日(火)をもって「貨幣資料館」閉館のお知らせが、関係者に郵送された。

造幣博物館(大阪市、土・日・祝日は休館、06-6351-8509)や日本銀行貨幣博物館(東京都中央区、原則は月曜休館、03-3277-3037)など公設博物館は大丈夫であろうが、銀行系貨幣展示施設は9月期末決算の模様によっては、さらに閉鎖が拡大する可能性が高い。

コレクションの劣化等が憂慮、せめてデータ保存だけは急務

一旦閉鎖された場合、コレクションは湿度の高い金庫室に凍結され、劣化は避けられないと憂慮される。当学会としても、コレクションの計測をとまなうデータ保存措置などの対応が望まれる。現在オープンしている施設だけでも、早期に見学しておくのが賢明だろう。なお、銀行系施設は銀行の営業時間にオープンするのが原則であり、すべてが無料であるが、見学の際には前もって個別に照会されたい。

菘輪善蔵氏の会長就任を祝う会を開きました

理事（会員・渉外部長） 日本計量新報社論説員 横田俊英



菘輪善蔵氏が日本計量史学会の第4代会長に就任したのを祝い、同学会の発展を応援するという趣旨の「菘輪善蔵氏の日本計量史学会会長就任を祝う集い」が、4月21日(土)午後3時から5時過ぎまで、東京都新宿区霞ヶ丘町10番地（国立競技場内）の「レストラン オリンピア」を会場に、菘輪善蔵氏の友人のほか計量史学会会員あわせて70名ほどが参加して開かれた。

この催しは、日本計量史学会の正規の催しとは全く別の行事として「菘輪善蔵氏の日本計量史学会会長就任を祝う集い実行委員会」の主催によって開かれたもので、実行委員会の構成は【委員長】山田研治

（日本計量史学会副会長）【委員】印南武雄（日本計量振興協会常務理事、都道府県計量行政機関OB代表）内川恵三郎（計量研究所・計量教習所OB、日本計量史学会理事）齊藤和義（計量教習所修了者代表、計量士、日本計量史学会理事）横田俊英（日本計量史学会理事、日本計量新報社代表取締役）の各氏。

菘輪善蔵氏は2001年4月1日付けで、宝月圭吾氏、林英夫氏、岩田重雄氏の後を受けて日本計量史学会の第4代会長に就任していたもので、菘輪善蔵氏をよく知る有志によって同実行委員会が組織され、開催されたもの。またこの催しは、前会長岩田重雄氏、前副会長高田誠二氏に感謝することを併せて、「計量史に親しむ集い」と銘打たれた。

日本計量史学会は1978年4月1日に発足、菘輪善蔵氏会長就任の日に23周年を迎え、会員数は発足時の19名から145名になっており、今後とも古代から現代まで計量史を幅広く調査・研究して行くことが望まれている。

とくに近代、現代の計量史を着実に記録し評価付けしていくことが大事であるという声が多く聞かれるようになってきている。このようななか、戦中から現代にいたるまで計量研究所など計量行政の第一線に身をおき、計量技術と計量行政の変遷を当事者として経験してきた菘輪善蔵氏の会長就任を契機に、一緒に仕事をしてきた仲間が手を携えて、今掘り起こしておかなくては埋もれてしまうことになる史実を記録し評価する作業への期待が高まっている。

また計量史学は、日本計量史学会が創立して25周年を明後年に迎えることになることから、歴史学あるいは考古学など周辺学問とも連携をとりながらすべての学問分野にまたがって重要な学問領域として計量史学が成長・発展するための新たな歩みを始めることが大事であるという認識も関係者の間に形成されつつある。

従来は計量史学を狭い分野の学問として見てしまう傾向があったため、計量史学に関わってもよいはずの人々が遠巻きに日本計量史学会に接するということがあった。

新会長の菘輪善蔵氏は、自身が経験分野と関係者に対して計量史学と日本計量史学会への密接な関わりを説いている。また計量史学を総合的な視野にたって新たな発展の方向を模索して行くことへの意欲も大きく、このため自身の領域以外の会員・役員と共同して事業に取り組むことへの意欲も示している。

この「祝い、感謝し、語る会」は、大略次の式次第で進行した。

計量史学のご案内、最近の計量史学の成果、今後の計量史学とその研究分野・研究方法などを中心にして（日本計量史学会副会長山田研治氏）

岩田重雄氏の業績紹介（前日本計量史学会副会長高田誠二氏）

菘輪善蔵氏挨拶

出席者の祝辞（林英夫氏、今井秀孝氏、矢野友三郎氏、佐藤克哉氏）

計量史を気楽に語る立席の集い（富山県高岡市のはかり座について＝塩崎利平氏、江戸期の小判等について＝西脇康氏）

計量史資料の紹介

その他

「計量史研究」の原稿を募集します

日本計量史学会の機関論文誌「計量史研究」は、会員からの投稿のほか、会員と非会員との連名による投稿も、募集しております。

理工系のみならず人文系、社会系、芸術系その他すべての学術分野での「はかる」営為の歴史を扱った原稿(原則として未発表のもの)をお寄せ下さい。記事の種別は、論文・研究ノ・ト・総説・資料・消息・書評・紹介(原典翻訳を含む)とし、1記事の分量は400字換算で30枚以内とします。ご投稿の採否は、編集部が委嘱する校閲者の所見にもとづき、必要により改編などの手順を経て、編集部が決定します。

記事のほか、表紙を飾る資料写真(800字内の解説を付けたもの)も歓迎します。

「投稿規定」および「執筆規定」は「計量史研究」No.21(1998年)以降のバックナンバーの最後のページに掲載されています。

計量史研究バックナンバーを頒布(各号とも会員1000円、非会員3000円、送料別途)

目録の請求等お問い合わせはFAX、電子メールで(FAX03-3269-7989、shm@beach.ocn.ne.jp)

「計量史通信」の原稿を募集します

総説、随筆、速報、紀行等の計量に直接、間接関係のある博物館・資料館・美術館・図書館の催し、書評、会員の研究ないし、調査内容の紹介、会員、非会員からの質問(答は原則として通信に掲載します)、その他のニュースなどが主なものです。特に「催し物」は計画段階の漠然としたものでも結構です。締切はなく、常時受け付けます。

複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、著作権者から複写権等の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。なお、著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接本会へご連絡下さい。

〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル3F 学術著作権協会

TEL: 81-3-3475-5618 FAX: 81-3-3475-5619 E-Mail: kammori@msh.biglobe.ne.jp

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission from the following organization which has been delegated for copyright for clearance by the copyright owner of this publication.

Except in the USA

Japan Academic Association for Copyright Clearance (JAACC)

41-6 Akasaka 9-chome, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan

TEL: 81-3-3475-5618 FAX: 81-3-3475-5619 E-MAIL: kammori@msh.biglobe.ne.jp

In The USA

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923, USA

Phone: (978) 750-8400, FAX: (978) 750-4744 www.copyright.com

2001年7月1日発行

日本計量史学会

〒162-0837 東京都新宿区納戸町25-1

TEL/FAX: 03-3269-7989

E-mail: shm@beach.ocn.ne.jp

URL: http://www.keiryoku-keisoku.co.jp/databank/gakkai/m_sociej.htm

郵便振替番号 東京 00170-9-66974

The Society of Historical Metrology.

JAPAN

25-1, Nando-tyo,

Shinzyuku-ku, Tokyo 162-0837 JAPAN

TEL, FAX: +81-3-3269-7989

shm@beach.ocn.ne.jp